



2月は『節分草』

You Ain't Heard Nothin' Yet ! ヤー!

# Vol.45 2023.02.10 えんじょい工房・『YAH!』編集室

責任者とは、事ありて責任をとる人のこと

この頃私利私欲がまかり通っている、それが奥深い所で渦巻いているうちはまだしも、世の中を支配していると思えない状況が大小、また広く狭くあちらこちらで見られる。私利私欲は在る、有るには在るがあくまでも内に陰に秘めたるもので、かつては“建前”を盾として、決して表に出てはならぬものであった。それが染み出ている、それどころか露見するに及び、誰もそれを抑えられていない。私利私欲、或いは勝手な思い込み(思想信条はあくまでも自由だが...)が堂々と?披歴、展開されている。後に咎められようとも、本音が漏れ、万民の前に提示されること自体が問題であろう。偏った意見、考えは言う方も聞く方も、ある種の人たちにはとても心地良いもので、「よくぞ言ってくれた、やってくれた...」などと留飲を下げるケースもあるとか、そうした“極端”が野放図に垂れ流しにならぬようにするのが政治であり、多少建前が醜いものを覆い隠すことになつたり、事実が有耶無耶にされるような姑息なこともままあるが、“極端”に事態が進まぬようにすることこそが政治の力なのだろう、そうでないといささかバランスを欠くことになりかねないのである。ごまかすのではなく、自己をコントロールできてこそそのバランス感覚というものであると考えるが、いかがか、自由と身勝手とは違うのだ。では、表に出てはならぬものが出てしまった場合はどうするべきか、それはもう誰か(責任者)が責任をとって、事態を收拾するほかないだろう。

【こんな唄に出くわした】

## 雨の日のブルース

作詞：橋本淳  
作曲：筒美京平  
歌：渚ゆう子

小雨に濡れている夜の  
ちいさな坂道のクラブ  
淋しい足音を響かせて  
私は一人

※暗いブルースを くちづさみ  
昔別れた人のため  
熱い恋の誘惑にたえている※

真紅の野バラを胸に  
飾って私は今日も  
貴方にもう一度逢える日を  
密かに待ってる

涙でまつげを濡らしても  
愛しい貴方はいないから  
せめて甘い思い出に浸りたい  
(※くり返し)

『京都の恋』に『京都慕情』はたしかに渚ゆう子の代表作かもしれないが、ベンチャーズとは無縁の?こんな唄にでくわした。忘れてしまっていたか、発表当時どうしたわけか馴染むことがなくて印象に残らなかつたか、今になって“沁みる”唄としての登場である。わかりやすい詞、心地よいメロディライン、そしてテンポと、スタツフを見てもまさに流行歌、馴染みやすく淀むところがまるでない、繰り返し聴いて飽きない“名曲”である。

【今月の花 二月・如月】

## 節分草

二月に咲く山野草、節分の頃から咲き始めるのでこの名前になったらしい。あくまでも山野草であって、何処にも派手さは無い、どこまでも謙虚、つまり、十分に好感がもてる花なのである。

【こんな映画を観てきた】

## 『シェルブールの雨傘』-1964/仏 監督:ジャック・ドゥミ

オープニングのカラフルな傘の往来、シェルブール駅での出征する恋人の見送り、そして雪のガソリンスタンドでの再会と永遠の別れ。台詞が全て音符付きで、そんなことはどうでもよろしい、ただただ16歳のカトリーヌ・ドヌーブが可愛らしくて...

...フランス北西部の港町シェルブール。自動車修理工の青年ギイと傘屋の娘ジュリエーブは結婚を誓い合った同士だったが、ギイに送られてきたアルジェリア戦争の徴兵令状が2人の人生を大きく翻弄する...というお話。40年もの大昔、シェルブール駅のホームに立たんと目指したが、まだTGVはパリ・リヨン間のみの運行で、ノルマンディー方面へはパリから片道4時間、それを日帰りというのはさすがにと、断念したという記憶がある。半世紀以上も昔の作品でもあり、さすがにすでにリバイバル上映であったが、冒頭の傘が左右上下に交錯するオープニングには圧倒されたものだ。